

鹿児島県の昭和初期における「綴方教育」に関する一考察

— 雑誌『赤い鳥』に焦点を当てて —

原 田 義 則 [鹿児島大学教育学系 (国語教育)]

市 成 萌 [鹿児島大学教育学部]

A study of Writing education in the early Showa period in Kagoshima

— Focus on the magazine *Akaitori* —

HARADA Yoshinori · ICHINARI Moe

キーワード：大正から昭和初期、『赤い鳥』、磯長武雄、綴方教育、標準語と方言

1. 研究の目的

原田 (2014・2015)¹では、昭和30年代の作文指導が、「表現指導と生活指導の理論的統合」が試みられた一方で、小学校現場では「時間の制約」「コンクール至上主義」などの現実的な問題から、教師主導の授業に傾いていたことを明らかにした。しかし、戦後の作文指導の調査を進めるうちに、その源流が大正～昭和初期の「綴方教育」と深く関係していることが分かってきた。そこで、本研究では「綴方教育」の出発点として多くの論考が示唆している雑誌『赤い鳥』に着目し、鹿児島県の「綴方教育」との関係について、新たな考察を加えることを目的とする。

2. 研究の方法

本稿で着目する『赤い鳥』は、大正から昭和初期にかけて刊行され、一大ムーブメントを起こした児童文芸雑誌である。鈴木三重吉が主宰した同誌には、小川未明や芥川龍之介、有島武郎らといった一流作家が寄稿したことにより高い芸術性が保証され、加えて児童生徒の綴方や自由詩などを広く募集し、鈴木三重吉や北原白秋らの手により選抜して掲載する機能を持っていた。その為、同誌が当時の芸術教育運動や後の生活綴方運動に影響を及ぼしたと言われている。大槻 (1955)²は、当時の状況を『赤い鳥』が「地方の現場の教師の実践に移されて普及するにつれて、(中略) (引用者補足：綴り方が) 文芸的なものから生活的なものへ移行するにいたった」と述べている。そして、昭和4年の世界恐慌を受けて労働苦にあえいでいた農村の学校では、『赤い鳥』によってもたらされた写実的な目で、ありのままに生活を捉えて書かせる「生活綴方」が強力になっていった。昭和4年に誕生したとされる「北方綴方」は、こうした当時の状況と結びつき、瞬く間に全国に広まっていったのである。大槻 (1955) は、当時の状況を総括し、「『赤い鳥』が獲得した綴り方における児童中心性は、『生活綴方』の旗印の名のもとに、児童の生活内容の現実に確かな根をおろしていった」³としている。

その影響は本県にも及び、若見 (2009) の分析によれば、『赤い鳥』を定期購読していた教育関連団体の数は「1位は鹿児島、2位以下朝鮮、北海道、長野と続いて」いたことが分かっている。しかし、鹿児島県のどの地域の購入数が多かったかについては記載されていない。

そこで、『赤い鳥』の巻末に掲載されることが多かった「賛助購読者名簿」から、鹿兒島県在住者・鹿兒島県の教育関連団体の名前を探し出すため、『赤い鳥』全196冊を通読し、「鹿兒島県『赤い鳥』定期購読者(団体)一覧表」を作成することとした。また、投書欄や創作物(童謡・児童自由詩・綴方等)の投稿欄にも、鹿兒島県から掲載されたものがないか調べて、「鹿兒島県『赤い鳥』創作物掲載者一覧表」も作成することとした。⁴さらに、掲載が多かった学校等にも足を運び、当時の足跡を訪ねて『赤い鳥』との関係性を立体的に描出することとした。

3. 『赤い鳥』について

1900年代に入ると、大正デモクラシーの気運とともに、教育界では教育改造運動が勃興し、自由主義・児童中心主義の教育思潮が広がってきた。個性教育・創造教育・芸術教育の萌芽である。また、『赤い鳥』創刊の前年には私立成城小学校が、日本初となる研究的な実験校として設立され、新教育の実践を推し進めていった。『赤い鳥』は、こうした教育界の新しい動きの中生まれた雑誌である。

『赤い鳥』が創刊されるまで、世間で言う「児童文学」とは、巖谷小波の代表するお伽話のような「小波系」と、押川春浪の代表する、いわゆる大衆児童文学である「春浪系」、立川文庫のような豆講談本の3系列であった。しかし、それらは「大正期に入っただけで既に限界がみえ、新児童文学の「新生」への期待がもたれていた」⁵とされている。その折、鈴木三重吉に娘・すずが生まれ、三重吉は童話を書き始める。三重吉初の童話集、『湖水の女』の序文には、次のような記述がある。

私は、これまで世の中に出ている、多くのお伽話に対して、いつも少なからぬ不平を感じていた。ただ話が話されているというのみで、いろいろの意味の上品なものが少なくない。(中略)私はいろんな点に十分注意して書いたつもりである。文章としては、われわれが実さいに使っているだけの平易な純な口語のみを選んで、出来るだけ単純に書こうと努力した。

三重吉は、娘に与えるよりよい読み物を求めて自ら、童話や子供のための読み物を書き始めたのだった。注目したいのは、『赤い鳥』の標榜語にも見られるとおり、それが「話材の純清を誇らんとするのみならず、全誌面の表現そのものに於て、子供の文章の手本を授けんとする」ものだったということだ。この「子供の文章の手本」になろうという思いは、子供の創作物の作品評にも表れることになる。例えば、「実感にみちた達者な叙写です」「敏感な叙写です」「画面的な感じをまざまざと出しています」という三重吉の綴り方観ともいえる、童心のままに素直にありのままに書かれた作品を賞賛するのである。⁶

4. 鹿兒島県の「綴方教育」における『赤い鳥』の影響

4.1 『赤い鳥』の受容

『赤い鳥』には、「通信」「少年少女」「談話」「講話」というように名称は変更・付加されながら、ほとんどの巻末に投書欄が設けられていた。⁷その投書欄に、鹿兒島から投稿、掲載されたのは総投稿数369通中、わずか4通であった。うち2通は小学校の教員による投書である。中でも第2巻第4号に掲載された投書は、『赤い鳥』の受容という点で参考になる。(仮名遣いは原文のままだが、旧字体は新字体に修正した)。

第2巻第4号（1919年4月）「通信」投稿者 松元喜代史

鈴木先生、私ども小学校の教育者として、こんな立派な子供の雑誌をお出し下さることに對しまして、お礼の申し上げやうもありません。

詳細については不明だが、鹿児島の小学校教師であった松元が、児童のための文芸雑誌『赤い鳥』の登場を非常に喜ばしいものと受け取っていたことが分かる。また、第3巻第1号掲載の児童からの投書からも、同様のことが言える。

第3巻第1号（1919年7月）「少年少女」投稿者 山下尋常小学校6年 後藤順一

五年の時であった。先生が「毎月雑誌を買ふ人はこんどから赤い鳥を買ふがよい」と仰つた。僕は学校から帰るとすぐお父さんに「赤い鳥」を来月から買って下さいとたのんだ。（中略）僕は「赤い鳥」の来るのを今か今かとまつていた。そのうちに、ある日お父さんがポケットに「赤い鳥」を入れて帰つて来られた。その時の僕のうれしさは、天にも昇つたやうであつた。

投稿した児童が「五年生の時」というのは、『赤い鳥』が刊行され始めた1918年（大正7年）のことだろう。僅か4通ではあるが、それでもこれらの投書により、刊行初期から『赤い鳥』を読み、感銘を受けた教員が他にも存在していたと容易に推測できる。また、1919年や1920年の賛助購読者名簿に名前のある武山宮定氏と柏常秋氏は、大城尋常高等小学校（沖永良部島）の校長だったことが分かっている。⁸

4.2. 『赤い鳥』の購入団体及び地域の特定

若見の分析によると、教育関連団体の定期購読は鹿児島が1位であったと冒頭で述べた。しかし、明らかなのは数字のみであり、具体的な団体名は分からなかった。そこで、若見の分析の正確性を確かめるという意味でも、『赤い鳥』全196冊を通読し、【表1】を作成した。その際、若見と同様に、判読できないものは除外し、繰り返し登場する名前についてはそれぞれ一度だけカウントした。以下がその表である。

【表1 鹿児島県の定期購読者・団体名簿】

刊行年	巻	号	団体	累計	賛助購読者名(団体名)
1918	1	3	7	7	石津義忠、龍岡歳定、柴田務、石黒兼時、小林茂、松本千代三、藤森保三
	2	1	2	9	鈴木重雄、鈴木脩蔵
1919	2	2	1	10	蒲原春夫
	2	3	3	13	伊地知のり子、今林成光、喜入壽
	2	5	4	17	遠矢徹志、長濱義純、有馬純雄、前本和雄
	2	6	3(1)	20(1)	竹内幸子、指宿春日、岩崎興藏、(岩川尋常高等小学校児童文庫)
	3	1	1	21(1)	中山平治
	3	3	2	23(1)	前田定芳、馬場みね子
	3	4	(2)	23(3)	(大丸尋常小学校、恒吉尋常小学校)
	3	5	2	25	入部兼道、橋口繁
	3	6	6(1)	31(4)	信國さと子、久木元勝秋、新村三省、和田静子、田中荒城、桑波田茂(魚見尋常小)
	4	1	4	35(4)	前田友二、伊牟田信雄、柏常秋、鮫島俊夫
1920	4	2	3	38(4)	中島興志政、田邊尚、武山宮定

	4	3	3	41(4)	牧野淳一, 中福, 大脇為清
	4	5	2(1)	44(5)	横畑忠彦, 末吉幸吉, (母間小学校児童文庫)
	4	6	4	47(5)	湯田邦人, 鮫島宗義, 川路正哉, 伴政都
	5	1	7(2)	54(7)	上井元, 盛元善明, 寛忠雄, 三坂秀夫, 上田廣, 瀬戸口力也, 國府とよ子, (笠沙尋常小学校, 新牧尋常小学校)
	5	3	3(2)	57(9)	門松えつ子, 房岡義成, 有馬てる子, (月野小学校尋常5年級, 櫻峰尋常高等小学校)
	5	4	4(2)	61(11)	上園みふじ, 遠矢忠秋, 濱田たま, 谷口喜一, (下伊集院小学校, 別府小学校尋常科第6学年8の組)
	5	5	5(1)	66(12)	武田仁太郎, 小濱浩, 山内まき子, 前田秀義, 長野敏吉, (田中尋常小学校)
	5	6	2	68(12)	野添卓郎, 永野文吉
	6	1	4	72(12)	川島良一, 山元一郎, 久木田秀徳, 有村等
1921	6	2	2(1)	74(13)	鶴田新盛, 藤島秀麿, (鹿児島児童文庫)
	6	3	2(2)	76(15)	出水溪流, 鮫島つるの, (粟窪小学校, 白川小学校)
	6	4	(2)	76(17)	(舞圭小学校, 大浦尋常高等小学校校友会)
	6	5	2	78(17)	川平すみ, 税所篤徳
	6	6	2	80(17)	西川兵吾, 野本あや
	7	1	2	82(17)	久保田弘, 石黒宇吉
	7	2	6(1)	88(18)	家弓鄭三, 沖彬, 平田武二, 田中安夫, 關美屋文, 千河義正, (田検小学校)
	7	3	4	92(18)	門内裕信, 久保夢藏, 古市北辰, 本田新虎
	7	6	5(3)	97(21)	酒田 (おそらく酒匂の誤り) 景善, 久木田さだ子, 松田泰藏, 近藤潔, 中堅志男, (内城小学校, 屋仁實業補習学校, 谷山小学校内児童文庫)
	8	1	(2)	97(23)	(戸口尋常高等小学校, 清水小学校)
1922	8	4	2(1)	99(24)	河野頼五郎, 遠藤清七, (西山図書館)
	8	5	3	102(24)	竹島筆, 尾辻健一, 神山松雄
	8	6	5	107(24)	土瀬口とき, 高野きくえ子, 日高さなゑ, 遠矢良明, 中川源弘
	9	1	4	111(24)	永井彦熊, 田中武光, 肥後昇, 荒川ゆきえ
	9	2	(1)	111(25)	(吉村小学校)
	9	3	2	113(25)	宮宏, 中野清次
	9	4	3	116(25)	赤崎盛林, 川原信志, 須賀正
	9	5	2(4)	118(29)	池田一, 福島操, (小野津小学校, 細山田小学校, 久志尋常小学校, 君名小学校児童図書館)
	9	6	2	120(29)	内之齒藤兵衛, 長野てい
	10	1	5(1)	125(29)	若松つみ子, 齋藤勇藏, 川内祐信, 三浦愛好, 梶原邦光
1923	10	2	2	127(29)	田中通雄, 園田ふち子
	10	3	2	129(29)	武川福静, 時長議
	10	5	1	130(29)	中川久光
	11	1	1(2)	131(31)	安田ひで子, (知覧小学校第三文芸社, 玉利小学校尋六児童文庫)
	11	2	2	133(31)	中村とみ子, 前田榮熊
	11	3	3	136(31)	牧瀬松雄, 丸野ゆみ子, 田元時義
1924	12	4	2(1)	138(32)	中園紫竹, 橋野賢, (市比野小学校)
	12	5	1	139(32)	野口多み子
	12	6	1	140(32)	川端龍兵衛
	13	1	2	142(32)	橋口一夫, 秋葉書店
	13	2	3	145(32)	徳盛, 樋口順藏, 松田英介
	13	5	1	146(32)	日高喜平
1925	14	3	2(1)	148(33)	山元なるみ, 郡山富子, (星原小学校)
	15	5	3(2)	151(35)	中川早苗, 池尻五郎, 辻光雄, (阿傳小学校, 屋仁小学校)
1926	16	1	1	152(35)	中村トミ子
	16	3	1	153(35)	大島郡 堀之内政子
1927	19	1	1	154(35)	大島郡 桑波田妙子
	19	3	1	155(35)	始良郡 森原明子

休刊を経て (1932年～)

1932	1	2	23(1)	178(36)	山下勝志, 入佐忠雄, 永井八千代, 緒方静子, 松元キヨ, 岡部ひさ子, 春日一, 葛西宣子, 積二太郎, 田原正治, 玉水ミツ子, 野中義一, 山下利史, 若原淑子, 中島忠利, 佐々木義綱 (6冊), 石井清雄, 中村茂守, 峯吉廣志, 園田親儀, 新田稔 (2冊), 月野貞, 大森禎子, (國上小学校)
------	---	---	-------	---------	--

	1	4	26	204(36)	【鹿児島県種子島部会…幹事：梶原邦光※既出 羽生道孝、得一夫、榊一二、古賀兼成、奥田大洲、吉良仁夫、山下操、國上イソ子、上園リン子、山口クニ子、袖野久子、相原清子】、田中ウメヲ、川添ミチエ、麓ヨシ子、鍋倉鐵男、齋藤善美、大山大道、岩切廣太郎、國村年、上原マサ子、松田イネ子、喜久奎吾、小畑國高、益田茂、乾養和
	2	2	1	205(36)	上園金男
1932	4	1	4	209(36)	姥塚房市郎、青柳文壽、仲原忠勇、横田勝三郎
	4	2	1	210(36)	西元正一
	4	3	1	211(36)	直島孝綱
1933	5	6	1	212(36)	秀島穉志
1934	7	3	1	213(36)	永井永治
	7	6	1	214(36)	下之角ウメ子
	8	3	3	217(36)	和田義廣、鎌田しほ、徳永成吉
1935	9	2	7(1)	224(37)	田中通夫、田邊行雄、中島千代子、中村茂義、宮田哲郎、久保信一、田中幸男、(中洲小学校)
	9	3	2	226(37)	大野甚五、逆瀬川三男
	9	4	1	227(37)	原田俊夫
	9	6	1	228(37)	二葉定吉
	10	3	1	229(37)	鈴村ハツ
1936	11	2	1	230(37)	松村鐵男
	11	5	1	231(37)	馬場昌作

※ 若見佳世子の分析とのズレ…個人：+26 教育関連団体数：±0

個人定期購読者の総計には差異があったものの、定期購読をしていた教育関連団体の総計は、若見の表と一致した。ただし、定期購読期間の下限は3ヶ月であり、それぞれが定期購読を止めた時期までは不明である。そのため、あくまでも「3ヶ月以上定期購読をしていた人物・教育関連団体」の総計であることを断っておく。

そして、定期購読をしていた教育関連団体37団体を地域ごとに分けると、【表2】のようになる。

【表2 地域ごとの定期購読校一覧表】

団体数	市町村・島名	教育関連団体名
5	鹿児島市	鹿児島児童文庫、谷山小学校内児童文庫、清水小学校、中州小学校、桜峰尋常高等小学校（桜島）
2	南九州市	粟窪小学校（正しくは粟ヶ窪小学校か）、知覧小学校第三文芸社
1	鹿屋市	細山田小学校
2	指宿市	魚見尋常小学校、額娃小学校
2	薩摩川内市	西山図書館（西山小学校内図書館と思われる）、市比野小学校
1	日置市	下伊集院小学校
4	曾於市	岩川尋常高等小学校児童文庫、大丸尋常小学校、恒吉尋常小学校、月野小学校
1	伊佐市	田中尋常小学校
1	霧島市	玉利小学校尋六児童文庫
3	南さつま市	笠沙尋常小学校、白川小学校、大浦尋常高等小学校学友会
2	種子島	星原小学校、国上小学校
1	徳之島	母間小学校児童文庫
5	奄美大島	田検小学校、屋仁実業補習学校、戸口尋常高等小学校、久志尋常小学校、屋仁小学校
1	沖永良部島	内城小学校
2	喜界島	小野津小学校、阿伝小学校
4	所在地不明	新牧尋常小学校、別府小学校尋常科第六学年八の組、君名小学校児童図書館、吉村小学校

『赤い鳥』が刊行された大正～昭和初期にかけて、鹿児島県の教育の中心は、師範の附属小や鹿児島市尋常高等小学校（現在の名山小学校）だったと言われる。⁹ しかし、この定期購読団体名には、地方の校名も多く挙がっており、全県的に『赤い鳥』に注目が集まっていたと言えるだろう。

4.3 『赤い鳥』による鹿兒島県小学校の綴方教育への影響

『赤い鳥』本誌から見える鹿兒島県とのつながりは、定期購読者名簿以外に、もう一つある。それは、読者の手による綴方や自由詩を掲載した投稿欄だ。掲載された作品には、不明の場合を除き全てに名前と住所（児童生徒の場合は在籍する学校名と学年）が付されているのである。また、選外佳作欄もほとんどの巻末にある。この欄では、入選にこそ至らなかったが、良い作品を送った投稿者の名前と都道府県・地名が掲載されている。そこで、選外佳作欄も含めて、鹿兒島から掲載された作品のタイトルと作者、作者の住所（あるいは在籍する学校名と学年）を全号から抜き出し、【表3】を作成した。

【表3 鹿兒島からの綴方・(少年少女) 自作童謡・創作童謡・創作童話投稿者】

※自作童謡…15歳以下、創作童謡…15歳以上 太字…入選者 細字…選外佳作欄に名前があった者

刊行 年	巻 号	綴方	自作童謡 (7巻第4号～児童自由詩)	創作童謡	創作童話
1919	2	5 「作文の宿題」玉利伸吾	「木の葉」久保澄雄 (鹿兒島女子師範附属小学校 4年), 「さいのかみはら」玉利伸 吾		
	2	6 「忘れられぬ姉さんのゆめ 言」小妻芳子			
	3	1 「山下君」中村三吉, 「今日 の天気」吾平田正夫, 「はるが来てみた」井上瑞一 郎			
	3	2 「夕方」小濱一男			
	3	4		「雨」江崎千代 子	「救ひの鈴」四元尚 孝
	3	5		「つばめ」四元 尚孝	
	3	6 「荷馬車で歸った犬」鮫島喜 久二, 「櫻嶋の思ひ出」久保 朝夫	「虹」鮫島喜久二		
1920	4	1 「大豆打ち」大西のし (揖宿 郡魚見尋常小学校6年) 「いかつり」川畑森造			
	4	3 「兵營まで」下吹越太吉・吹 留栄次・有村岩吉 (揖宿郡魚 見尋常小学校6年) 「ひかう き」川畑照海	「馬の子」井之上優 (伊佐郡本 城小学校専5)		「黄金鳥」徳田基
	4	6	「鳥のをばさん」【推奨】吉永 鐵男 (山下尋常小学校4年)		
	5	4 「茶の實がつせん」川畑照海			
	5	6 「蠅たいぢ」上原尚雄	「白いひよこ」林静		
1921	6	1 「かいせんしやうぎ」野間清 志, 「雨」上川路計也, 「せみ とり」高原龍巳			
	6	3 「私の思ひ出」出口しづえ			
	6	4 「さこん太郎造り」下堂蘭精			
	6	5 小林善夫			
	6	6 入部兼道, 上館天逸			「馬鹿息子の話」伊 地知孝太郎
	7	2			
	7	3 川畑照海			
	7	4 木佐貫達也, 上林山正治			
	7	5 有川はつゑ, 小倉文子	「水くみ」木佐貫達也 (掲載外 佳作)		
	7	6	「霧」有川はつゑ (掲載外佳作)		

1922	8	1	新保代次郎			
	8	2	古澤徳松			
	8	3	伊木忠道			「水遊び」今榮一火
	8	4	酒匂景善			
	8	5	西原ふみ子			「怒り」稲葉大受, 「廻りあひ」波江野 花子
	8	6	野田郁也			
	9	2		「とんり」とんがら」稲葉大受 (川邊郡知覧村), 福井勇, 宮 ヶ原達雄, 濱崎政雄		
	9	4		「ポプラ」永崎みち(知覧美科 女学校2年), 「競馬」田畑のみ (同校), 安樂千三	「積(こうし)」 葛西けいいち	
	9	5	□倉友美			
1923	10	1	岩元福美	「豆ひきの日」岩元福美(始良 郡玉利小学校専五)		
	10	3	鳥丸美登, 川畑照美(海?)	稲葉不二子		
	10	4				太田久
	10	5	鳥丸美登, 福永市二	桑木野光雄		
	10	6		「風」福山俊夫(山下小学校専 二), 「桑の葉」柿元操(肝属郡 吾平小学校専六), 「夕日」有村 七郎(山下小学校専二), 河野 行, 山内しか, 山田敏一		
	11	1	肥後俊子	「風」村田安子(鹿児島女子師 範付属小学校専六), 深島榮一 郎		
	12	5		中園喜節		
	12	6		信義一		
	13	5	鎌田秀粹			
1925	14	2	蒲原兼次郎	「冬」堂手武雄(始良郡薮辺小 学校高一), 「野原」川田代國(肝 属郡佐多小学校専五), 瀬戸川 三之助, 川邊如水, 入ヶ町堅蔵		
	14	3		「さびしさ」萩原虎男(伊佐郡 曾木小学校専五), 「ふゆ」鹿倉 静男(同校同学年), 嶺崎正幸		
	14	5		「夕方」尾崎愛吉(肝属郡佐多 小学校専五)	「友だち」磯長 武雄(肝属郡佐 多小学校)	
	14	6		「月夜」木ノ下徳二(肝属郡佐 多小学校専五), 「子供」入ヶ町 堅蔵(同校同学年), 蓬萊辰巳, 長濱新造	磯長武雄	
	15	3		「つばめ」新地佐吉(伊佐郡曾 木小学校専五)		
	15	4		「杉の皮」川原實(伊佐郡曾木 小学校専五)		
	15	5	前田兼盛	「日傘」黒木宗市(肝属郡佐多 小学校専六), 川邊如水, 木ノ 下徳二		
	15	6		中野とみ子		
	16	3	黒田陟, 尾崎愛吉	「ほととぎす」【推奨】、「ぬく といひ」【佳作】長濱新造(肝 属郡佐多小学校専六), 尾崎愛 吉	醒支路	
	16	5		「時計」黒岩一男(荒田小学校 高二)		
	16	6		「夕方」【推奨】、「雨上がり」		

				木の下徳二 (肝属郡佐多小学校 専六), 「椿」川田代國 (同校同 学年), 「冬の夜あけ」蓬萊辰巳 (同校同学年), 岩崎盛枝		
	17	2		「夕方のすずめ」【推奨】河原 初枝 (伊佐郡曾木小学校専四)		
	17	6	若松茂行			
1927	18	1		「夕方」【推奨】長濱新造 (肝 属郡佐多小学校専六)	時長義	
1928	20	3			時長義	
	20	5		「天気」【佳作】葛正五 (大島 郡小野津小学校専五)		
	20	6			岡井良平	
	21	6	鮫島すゑ			
1929	22	1	樗木一男			
	22	3		「風はいつも吹いている」【推奨】 落合豊 (熊本郡国上小学校高 二), 「ひよこ」【推奨】黒木宗 久 (同校専四), 「夜があけた」 【佳作】伊東のり (同校専四), 「秋の日」大屋茂 (鹿児島小学 校専四), 「軍艦」平川貞夫 (同 校同学年), 「新聞社から」佐賀 幸雄 (同校同学年)		

この表から浮かび上がってきたのは、地方の学校名の多さだ。入選作品の作者として指名が掲載されている児童生徒の在籍校を、作品数別にまとめると【表4】のようになる。

【表4 在籍校別入選作品数】

入選した児童作品が 1作品ある学校	伊佐郡本城小学校・始良郡玉利小学校・肝属郡吾平小学校・始良郡藪辺小学校・大島郡小野津小学校・鹿児島市荒田小学校
2作品ある学校	鹿児島女子師範附属小学校・知覧実科女学校・指宿郡魚見(尋常)小学校
3作品ある学校	山下(尋常)小学校・鹿児島小学校
4作品以上ある学校	伊佐郡曾木小学校……5作品 熊本郡国上小学校……6作品 熊本郡榕城小学校……10作品 肝属郡佐多小学校……12作品

本県における小学校教員が、県本土及び離島・僻地等へ積極的に転勤していく歴史は、昭和40年代に本格化された。気風刷新という理由であるが、その目的には地方の教育力の伸展も含まれていた。現代と比べて、教育情報の入手が困難であったであろう離島の小学校などの作品が、全体の82%を占める結果は注目に値する。なぜ、地方の学校の作品が、入選作品数の多数を占めたのだろうか。

そこで、5作品以上入選している、曾木小学校、榕城小学校、佐多小学校に注目し、さらに分析を進めた。すると、入選作品の年度と学年に大きく偏りがあることが分かった。たとえば、曾木小学校から出た入選者は、1925年に4人(尋常科5年生)、翌年に1人(尋常科4年生)である。これは、才能のある一人の児童が何度も入選しているためではない。また、榕城小学校は1931年に6人(尋常科6年生)、翌年に1人(尋常科3年生)という結果だ。佐多小学校も、1925年に入選した5人のうち、4人が5年生、1人が6年生であった。1926年の入選者も6年生が4人、翌年に6年生が1人(年度が変わる前なので昨年の6年生)と偏りが大きい。

入選者は一つの学年に集中しており、年度が変わるとリセットされるという傾向が見える。この法則から推測されるのは、一部の教員の熱心な指導があつての入選だったのではないかということだ。

その推測を裏付ける人物に、磯長武雄がいる。戦前の鹿児島の綴方教育に貢献した教員であり、自身も創作童謡欄(第14巻第5号)に入選している。

磯長は、明治34年から昭和13年を生き、鹿児島県肝属郡根占町出身の小学校教員であり、「昭和初年代の綴方教育史の中に必ずその名を見出すことのできる」¹⁰人物と言われ、磯長についての研究は、新名主健一「鹿児島県国語教育史(IV)―磯長武雄研究ノート―」に詳しい。これによると、磯長は佐多尋常小学校代用教員(大正12年～昭和3年)、鹿児島尋常小学校正式教員(昭和4年～昭和7年)であったという。磯長が教員であった期間と、佐多尋常小学校や鹿児島尋常小学校からの児童詩の入選が多かった時期は一致しており、彼の指導が児童の詩を入選に導いたことは明らかである。磯長の追悼誌『驥歩』¹¹には、磯長の同僚の田代徹也が、「(磯長)先生が童詩の指導に手をそめられたのは、古く大正12年の頃である。(中略)先生は「赤い鳥」を手にとられて児童自由詩の存在を知り大いなる歓喜と燃ゆるが如き情熱をもって九州本土の南端の一漁村において孤独の力で此の道を開拓なされたのである。(後略)」と記している。

その後磯長は、その力量が認められ鹿児島尋常小学校の綴方科主任として迎えられる。そして、2年前に着任していた副田凱馬らと「市尋高グループ」形成した。副田が、戦前戦後を通じて「南方綴方」のリーダとして名高い人物であることを鑑みれば、現在の鹿児島県の作文教育に連続と続く「綴方教育」は、ここから始まったと考えられよう。そして、その「燃ゆるが如き情熱」は、『赤い鳥』の定期購読者や、佳作・入選作品の関係者を通じて、離島を含む鹿児島県全体に広がっていったではなかったか。すなわち『赤い鳥』は、鹿児島県の「綴方教育」の出発に大きな影響を及ぼしていたと考えられるのである。

4.4. 表現と方言

『赤い鳥』を取り巻く綴り方教師によって産声をあげた、本県の「綴方教育」は、その後どのように成長していったのだろうか。それを探るために、『鹿児島県国語教育史資料―明治・大正期篇―』¹²に寄せられた、鹿児島男子師範学校附属小学校の教員であった東田喜兵衛の言に着目したい。¹³(下線は引用者)。

発音が悪かったり、訛音が多かったりすると、文の朗読も完全には出来ないし、書写や綴り方にも欠陥が多くなる道理であるから、尋一の言語教育の死活は、直に国語教育の死活に関する訳であります。

「鹿児島県では、あらゆる時期に方言矯正に力を注いでおり、指導の効果を急ぐ余りに罰として方言を使ったことを示す札を下げさせたような行き過ぎた指導もみられた」¹⁴ことが広く知られている。この論稿はそのような教育の実態を批判するものであるが、そこまで矯正を強いた理由が、書写や綴り方への悪影響を避けるためだったということを下線部が示している。

また、児童自由詩の指導の中で標準語教育が行われていたと考えられる資料に、磯長の「方言駆使の限界」という論稿がある。¹⁵ 磯長は、児童に詩を方言で書かせることの効果を論じた青森の三上斎太郎の主張¹⁶を受けて、「一つの主張として、兎に角面白いと思つた。」と述べている。しかし、詩の全てを方言で書かせることについては、「かういふ作品が苟も児童詩教育の名に於て公然優秀作品として許されていゝものか。」と疑問を呈している。それは、「原作の儘では何度読んでも我々には意味が通じない」ためである。低学年の児童ならば仕方がないが、高学年は台詞の中など表現上必要である場合を除いて標準語を用いるべき、という立場であった。なお、名詞の方言については標準語に直して表現させる方針を取っており、「寧ろ方言矯正の最もよい機会だと信じてゐる」と同論稿で述

べている。それが鹿児島の教師のスタンダードな立場なのかは分からない。だが、当時の綴方教育において権威があった磯長の言説が、多くの学校関係者に影響を与えたことは想像に難くない。

これらのことから、当時の鹿児島では、話方・綴方の両方で標準語教育が重要視されていたと考えられる。そして、『赤い鳥』が鹿児島の教育関係者に求められたのも、児童文学の受容の機会としてだけでなく、標準語のモデルとして（標準語教育のため）という見方も出てくる。

『赤い鳥』を用いた標準語教育がおこなわれていたことを示すと考えられるものとして、『赤い鳥』本誌から次にいくつか例示する。

「風」福山俊夫（山下小学校尋2） 第10巻6号（1923年）

川畔のさゝが、
さらさら言うてみました、
それから風が、
ふいて來ましたら、
こんどはなほ、
さらさら言ひだしました、
むかうのさゝも、
さらさらと言ひだしました。

「大根切り」鮫島則彦（佳作）（熊毛郡榕城小学校尋6） （復刊後）第2巻1号（1931年）

お母さんと話したい晩。
お母さんは大根切つてる。
きれいな切れ輪、
水つまい切れ口、
あまさうな切れ口。
切れ口に電燈が光つてる。

「雨」宮原力三（佳作）（熊毛郡国上小学校尋3） 第十一巻三号（1936年）

私はこまつたぞ。
私はこまつたぞ。
雨よふるな。
雨がふれば私がぬれる。
雨よふるな。
みちが、じゅべへになるぞ。
早くはしれ、家につくぞ。
もうちきだ、早くはしれ。

大正12年に掲載された「風」は、磯長(1934)¹⁷が述べたように、「花鳥風月の美にのみ陶醉する詩人のように小さくまとまった」感じが拭えないのに対し、昭和6年・11年に掲載された2作品には、いずれも個人の「感情と意志」¹⁸が込められた「生活の認識」¹⁹へと変化している。「生活綴方」で叫ばれた「生活をありのままに書く」が見えるのである。これは、先述したように、本県の「綴方教育」が全国的な流れと同様に、『赤い鳥』から始まった「文芸的な綴方」が「生活綴方」へと移行していったことを推測させる。事実、磯長も自身の論考の中で『赤い鳥』の初期(大正7年・1918年)の掲載作品を批判し「今日及び明日の児童詩は(中略)生活の建設へ進路を取らねばならない」²⁰と述べている。

この変遷については大変興味深い点ではあるが、別の機会に分析するとして、改めて児童が使用している言葉が「標準語」であったことに注目したい。「標準語」は、明治中期から昭和前期にかけて、東京地方の言葉を基に日本語を整備しようとした歴史の中で用いられた翻訳語である。頑強な方言を標準語に、という本県独自の問題が、戦後の国語教育でも常に話題となっていたことを考えると、昭和初期に活躍した磯長が「方言矯正の最もよい機会」として「綴方教育」捉え、また他の教師たちも追随したとしても不思議ではない。事実、『赤い鳥』に鹿児島から掲載された児童自由詩の全ては、「標準語」で書かれていた。「ありのまま」と標榜しつつも、書かれた言葉は、児童の生活語彙とは乖離した「標準語」であったのだ。

では、誰が、掲載に値する作品に修正させたのだろう。地理的にも文化的にも中央から遠い鹿児島という地である。入選したのは、地方の学校の生徒が大多数であった。果たして児童だけで、普段使っている言葉とは違う、「標準語」を使いこなした作品が書けるだろうか。正しい標準語で綴るには、教師の指導が必要だったであろう。熱意ある当時の綴方教師の姿が思い浮かぶ。しかし、同時に、「ありのままに書かせる表現指導」に「方言の矯正指導」が滑り込むことによって、次第に教師先導型の指導へと変わっていったのではないかと、という疑問も湧いてくるのである。すなわち、『赤い鳥』から出発した本県の「綴方教育」は、表現指導と方言指導という本県独自の問題を孕むことで、他県とは違った変遷を辿っていたのではないかと、推測されるのである。

5. 研究の成果及び今後の課題

本研究の成果として、次の点を明らかにすることができた。

- ・ 『赤い鳥』を定期購読していた、本県の教育関連団体の数は「全国1位」という報告があったが、今回の調査により、特に地方の学校に多く購読されていたことが分かった。
- ・ 大正後半から昭和初期において、鹿児島県の綴方教育に多大な貢献をした磯長武雄が、雑誌『赤い鳥』を活用していたと考えられる。
- ・ 児童自由詩の投稿作品の中に方言が一切見られないことや、磯長らの鹿児島の方言に対する言説から、「ありのままに書かせる表現指導」に「方言の矯正指導」が滑り込むことによって、当時の綴方教育が、次第に教師先導型へと傾いていったと思われる。

なお、磯長の母校でもある南大隅町立神山小学校や、購入数の多かった種子島にも足を運び、当時の資料の発掘にあたったが、本稿で紹介したもの以外は、発見することが出来なかった。今後は、離島の学校をはじめ、各地域の資料館及び当時の事に詳しい人物を訪ねるなど、調査の範囲を広げることで更に研究を進めていく。

6. 参考文献

- 1 原田義則 (2014), 「鹿児島県の小学校における『書くこと』の教育史 (1) —南方綴方』の一考察—」, 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要第24巻, pp.1-10, 原田義則 (2015), 「鹿児島県の小学校における『書くこと』の教育史 (2) —昭和30年頃における作文指導についての一考察—」, 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要第25巻, pp.13-22
2. 3 大槻一夫 (1955), 『日本の生活綴り方』, 国土社, pp.19-23
- 4 調査及び表の作成は全て市成が行い, 原田が検証した。なお, 本稿の「3」「4.1」「4.2」は市成の単著であり, その他は原田との共著。
- 5 滑川道夫 (1955), 『赤い鳥研究』, 日本児童文学会編, 小峰書店, p.26
- 6 大槻『日本の生活綴り方』(1955), p18の中で, このような三重吉の綴り方観を, ロマンティックな文芸主義だと述べている。
- 7 『赤い鳥』の投書欄の名称変更は王瑜『『赤い鳥』に関する研究—大正期日本創作児童文学の一側面として—』に詳しい。
- 8 和泊町立大城小学校 HP (www.erabu.net/ohjiroscho/guide/history.html) 沿革 最終閲覧日 2016年9月13日
- 9 田島一保 (1998) 『桜町のきら星』「根占の人物」シリーズ・第一集, 斯文堂株式会社, p.48
- 10 新名主健一 (1988) 「鹿児島県国語教育史 (IV) ——磯長武雄研究ノート——」, p.1
- 11 田代徹也 (1938) 「童詩教育と磯長君」, 鹿児島県綴方研究会 (鹿児島県師範学校附属小学校内) 発行, pp.83-84
- 12 千々岩弘一 (1990) 『鹿児島県国語教育史資料——明治・大正期篇——』南日本文化研究所叢書 15, 鹿児島短期大学附属南日本文化研究所
- 13 雑誌「鹿児島教育」第283号 (鹿児島県教育会編, 大正6年) に掲載された論稿である, 「尋一言語教授の実際」による。注12の資料に所収。引用はp.207から。
- 14 注13のp.217「解説」より引用。
- 15 百田宗治 (1938), 『綴方教程』, 厚生閣, pp.333-336 磯長武雄「方言駆使の限界」
- 16 注15と同様, 『綴方教程』所収, pp.326-329 三上斎太郎「方言駆使への考察」
- 17.18.19.20 磯長武雄 (1934) 「児童詩教育の精神」, 鹿児島県綴方研究会 (鹿児島県師範学校附属小学校内) 発行, pp.13-19